

■病弱の子どもたちへの実践事例

一人ひとりのニーズに寄り添う図書館づくりをめざして —病弱支援学級におけるマイクロライブラリー(MICRO LIBRARY)の現場から—

鹿児島市立坂元中学校

教諭 松田ひとみ

はじめに

本校は、鹿児島市の中央部にある公立の中学校です。1年生126名、2年生139名、3年生136名、計401名が在籍し、「自主（自ら学び正しく行動できる生徒）」、「友愛（友情を深め思いやりのある生徒）」、「錬磨（健康でねばり強い生徒）」、「勤労（勤労を尊び責任を重んずる生徒）」を校訓に掲げて、心豊かな生徒の育成を目指しています。

また、「チーム坂元中」として「あしたは青空」を合言葉に、教員と保護者が協力してよりよい学校づくりを進めています。

本校では、本年度初めてマルチメディアDAISY図書を導入しました。また、活用するうえでの利便性を考え、生徒と教職員が利用しやすい図書室と病弱支援学級および教職員が出入りしやすい場所に、マルチメディアDAISY図書を配置しています。

さらに、本年度の新しい試みとして、本校に開設されている病弱支援学級にMICRO LIBRARYという「ちいさな図

書館」スペースを作りました。そのスペースで「ワクワクドキドキ楽しいことを見つけよう」という学級目標のもと、生徒たちと一緒にゼロからの図書館作りを進めてきました。

MICRO LIBRARYの開設は、インクルーシブ教育の基礎を築くうえでも、重要な意味をもつ「多様な学びの場」の設定としての意味をもつだけでなく、生徒たちが明るい未来を歩いていけるようにという願いを込めたキャリアアップ教育の一つとしての試みとなります。

紙書籍と電子書籍とを置くことで、生徒たちは、小さくても新しいタイプの図書館づくりを経験することができます。その中で出会う一つ一つの達成感が、自己肯定感につながるというなあ、と考えています。

開設してからいくつかの壁にもぶつかりましたが、一つ一つの小さなつまづきを解決するために、自ら考え、それをもとに友だちと話し合い、行動するという姿勢も身につけてきました。

実践事例について

本校の病弱支援学級では、国語や自立活動の授業を通してマルチメディアDAISY図書を活用しています。この実践事例では、自立活動と国語科の授業での活用例について報告します。

マルチメディアDAISY図書活用の実際

(1) 対象となる子どもの実態

この授業の対象となる子どもは、それぞれ慢性疾患のある子どもたちです。また、教育課程においては、法令(学校教育法施行規則 第138条)や学習指導要領等に基づいて、一部の教科において下学年代替による授業や、学習上または生活上の困難の改善・克服を目的とした「自立活動」の授業を取り入れて授業を行っています。

(2) マルチメディアDAISY図書活用にいたる流れ

教育的ニーズに基づいて、より具体的な支援や配慮を検討するうえで活用される心理アセスメントの一つに、WISCによる検査があります。特別支援教育の現場では身近な心理的アセスメントとして活用されていますが、その結果を絶対的なものとして強調しすぎると、子どもたちをよりよく支援するという目的を見失うことにつながる場合もあります。

そのため、今回は病弱支援学級の子

どもたちの学習上の課題を明らかにし、よりよく読書支援をするための一つの参考資料として、WISC(2016年8月実施)の結果を活用しました。また、行動観察も併せて行い、実際の活用につながっています。

WISC-IIIの結果からみると、AさんとBさんは共に「言語理解(VC)」力はほぼ同値という結果が出ており、共に音読はできても、内容の理解につながらない傾向がみられます。

また、Aさんは、処理速度(PS)に困難を抱えています。そのため、目を見たことをすぐに覚えることや、目と手を協応させて素早く処理することを苦手としています。

Bさんは、知覚統合(PO)に困難を抱えており、目を見たことを理解したり、物事を空間的・総合的に処理したりすることを苦手としています。

それらの状況をふまえつつ、よりよい読書支援を行うために、マルチメディアDAISY図書を使用しました。

(3) 活用実践例

①自立活動の授業

使用した本：『あのほし なんのほし』



【本の情報】

作者の、みきつきみさんのリズムカルな言葉による文章と、あたたかみのある柳原良平さんの切り絵がマッチした作品です。「わいわい文庫」に入っている同作品を、iPadにインストールした形で活用しました。色合いもはっきりしており、生徒たちにとっても親しみのもてる作品だったようです。

【活用の実際】

2学期の自立活動の授業では、体調によって気分が塞ぎがちになったときの対処法についての学習を進めてきました。この実践例は、発展学習の授業の様子です。

空に広がる景色についての絵を描くことはできるものの、夜空を見上げる経験がほとんどない子どもたちです。しかし、夜空の話をする、興味深そうに話を聞く様子がみられました。

視聴前に本時の授業について教師が話をした際には、「月はまるいかたちと三日月だけだと思っていた」、「星は黄色か、金色みたいな色だけだと思っていた」、「先生、星には他にどんな色があるんですか?」、「夜の空にはたくさん動物や物語があるって、どういことですか?」という子どもたちの素直なつぶやきが『あのほし なんのほし』（マルチメディアDAISY図書）の授業を進めるうえでの一つの重要な

指標となり、それをもとに授業計画を進めました。

ただ、この作品は、登場人物がでてくるストーリー性のある物語作品ではないため、11分の作品を集中してみることができるか心配がありました。しかし、作品の視聴が始まると、二人は一つのiPadを一緒にのぞき込み、熱心に視聴しました。

視聴後は「外に出なくても自宅の窓からでも夜の景色を眺めることができる」ことに気づくとともに、「毎日変化する月の形や黄色や金色以外にどんな星の色があるのか、今夜から眺めてみようかな」という気持ちの変化についても話していました。

「理解面」から考察すると、AさんもBさんも「言語理解」に弱さがみられますが、この作品は平易なことばで書かれているため、興味・関心を持続させながら視聴することができます。そのことによって、子どもたちはあたたかみのある切り絵にも親しみをもてたようでした。

Aさんは、機械操作についての経験が少ないこともあり、当初は操作に戸惑う様子がみられましたが、ペア読書をすることで、その壁を乗り越えて安心して操作方法を習得し、作品内容についても理解することができました。

また、Bさんは小さい文字を読むことに困難を抱えており、通常の授業に

においてもプリントなどを拡大して使用している状況です。

しかし、マルチメディアDAISY図書のもつ「音声読み上げ機能」や、「文字の拡大機能」、読み上げているフレーズの色が変わる「ハイライト機能」のおかげで、読みに困難を抱えることなく、自分の興味・関心のある作品世界を楽しむことができていました。

読みが苦手な生徒たちが読みにつまずく原因は「文字の見えにくさ」、「読めない漢字があること」、「読み間違えて文章の意味がわからなくなること」などの要因が考えられます。

AさんとBさんも、紙書籍による読書の際には、それらの傾向が強く見られますが、マルチメディアDAISY図書のもつアクセシブルな機能は、子どもたちが読書に対して感じる高い壁をさりげなくフォローしてくれる有能なツールであると感じています。



読み通した成功体験が自信を生む

②国語の授業

使用した本（2冊）

『へんしん トンネル』



【本の情報】

言葉遊びが入っており、肩肘張らずに作品世界を楽しめる絵本です。そのため、読み聞かせ本としても活用されることが多く、幅広い年齢層に人気があります。

『かみさまからの おくりもの』



【本の情報】

「生まれたときに神様からもらった おくりもの」というキーワードについて、子どもたちは、自分がもらったものについて想いをはせたり、親は子どもが生まれたときを振り返ったりできる絵本です。

すべての子どもたちが、自分の良さについて自分自身で考えたり、友だちと一緒に考えたり、家族と一緒に考え

たり、さまざまなかたちでやさしい気持ちになれる本だと思います。

【活用の実際】

国語の年間計画の中にある「言葉と生活」および「読み物の世界」の発展学習として授業計画を立て、マルチメディアDAISY図書を活用しました。

2017年版の「わいわい文庫」のなかから読みたい作品を選び、視聴後に「どんな話だったかな?」と振り返り、まだ読んだことのない友だちのために、その本の紹介カード(図書目録)を作成するという流れで授業を行いました。

子どもたちは「わいわい文庫」のなかから自分で読みたい本を選ぶため、集中して作品を視聴し、学習にも意欲的に取り組んでいました。

また、作成した紹介カード(目録カード)をよりよく活用するために、目録を「わいわいArea Map 2017」のNDC分類ごとに区分・整理するという学習も行いました。

この授業を行うことで、子どもたちは図書館利用のあり方についてもよりよく学ぶことができました。そして、これらの学習は、子どもたちのキャリアアップ教育にもつながるものとなりました。

NDC区分の学習の際には、子どもたちの興味・関心を高めるために「わいわい文庫」のキャラクターとして使

われているクマ(「トモちゃん」)を用いました。

まずNDCの0～9までの分類を理解するために、キャラクターのくまを10個作成しました。

その後、分類分けを理解するために色塗りを行い、色ごとにNDC区分をするという流れを作りました。1時間あたりの授業の流れを、「書く時間」「読む時間」「考える時間」と短いスパンでリズムよく切り替えることで、あきることなく集中して、それぞれの学習目標を達成させることができました。

おわりに

病弱支援学級の子どもたちは、それぞれ慢性疾患を抱えています。また、子どもたちは病気による運動規制や生活規制があったり、病状によっては入院せざるをえなくなったりすることも予想される子どもたちです。

それらの生徒たちの個々の病気による健康状態への配慮を行ううえでも、ICTを活用した情報教育は大変有効な学習手段であるといえます。

特に、iPadに取り入れたマルチメディアDAISY図書は、入院の際には無菌室にも持ち込むことのできる電子書籍です。

そのため、病弱支援学級に在籍する子どもたちの不足しがちな経験の機会を広げたり、免疫力が低下したりする

際の感染に対する配慮につながったり、情報活用能力の育成や向上にもつながります。

マルチメディアDAISY図書を通して広がった新しい世界は、子どもそれぞれの困り感の壁を取り払い、「できた」「わかった」「おもしろかった」などの成就感や達成感をもたらすことができるため、教育的効果も期待されます。

さらに、「わいわい文庫」には絵本や物語作品に加え、さまざまな内容の読み物が入っているため、子どもの実態に応じて、子どもが直面している問題に対して、心理的側面からの「情緒的サポート力」や、免疫力などが低下した際に、状況を限定されずに利用できるという「実体的サポート力」、情報の幅を広げるうえでの「情報サポート力」などの3つの力をもたらす効果があります。

マルチメディアDAISY図書は、作製と寄贈を行ってくださっている伊藤忠記念財団の電子事業部のみなさんだけでなく、一つ一つの作品がさまざまな方々の真心により、一つの完成形になっています。著作者や各出版社、そして、多くの高校生や紙芝居の団体のみなさん、音訳ボランティアのみなさんや劇団員のみなさんたちのまごころいっぱいの想いをこうして受け取り、活用できる

ことに心から感謝しています。

子どもたちが楽しそうに「わいわい文庫」を視聴している様子を見るたびに、これこそがソーシャル・サポートの結集した形だと感じます。

紙の書籍を読むことに困難を感じている子どもたちが「読書の喜び」に出会うためには、目には見えにくいけれど確かにある高く分厚い壁の軽減が必要です。


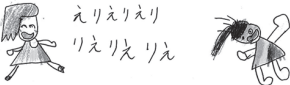
それこそが、「一人ひとりのニーズに寄り添う図書館づくり」において重要なキーワードになるのではないかと考えています。

まだ出会ったことのない未知の読書世界を体験することは、子どもたちの可能性の扉を一つずつ増やしていくことにもつながります。未来にはばたく子どもたちの根（たくましく生きる力）と翼（未来に向かってたくましく羽ばたく力）を育むためにも、教育現場において生徒が「自らの生活を豊かにしていく」ための経験を増やしたり、自らの明るい未来を創造したりするためのツールについての研究が必要であると考えます。

このことから、私自身もさらに、マルチメディアDAISY図書についての研究を進めていきたいと考えています。



マイクロライブラリー(教室内)の風景

わいわい文庫目録	
書名	『へんしんトンネル』
	出版社: 金の星社
	NDC : 913
	対象年齢: 幼児低学年
	再生時間: 9分
	取納場所: 17-1
こんなところをおすすめです。: 紹介者()	
<p>ことは「へんしん するのがおもしろい ですともなるといっしょ にみてもたのしいです おもしろいので おすすめですよ。」</p> 	
 <p>えりえりり りえりえりえ</p>	

生徒が記入したわいわい文庫目録